

○基本計画の名称：上田市中心市街地活性化基本計画

○作成主体：長野県上田市

○計画期間：平成 22 年 3 月～平成 27 年 3 月

1. 中心市街地の活性化に関する基本的な方針

[1] 上田市の概要

(1) 位置・地勢・歴史

上田市は長野県の東部に位置し、東京からは約 190km の距離にあり、長野新幹線上田駅までは約 90 分、上信越自動車道上田・菅平 I C まで約 150 分で日帰り圏内となっている。高速交通網以外に国道 18 号、国道 141 号、国道 143 号、国道 144 号、国道 152 号、国道 254 号、国道 406 号などの幹線道路のほか、しなの鉄道、上田電鉄別所線が、市内外を結ぶ重要な交通手段となっている。

県庁所在地の長野市の中心部からは約 40 km で、道路や鉄道で概ね軽井沢町との中間の位置にあたり、市の周囲は、北は長野市、千曲市、須坂市、坂城町、西は松本市、青木村、筑北村、東は嬭恋村（群馬県）、東御市、南は長和町、立科町と接している。現在の市域の面積は 552 km² で、南北約 37km、東西約 31km の広がりを持っている。

佐久盆地から流れ込む千曲川（新潟県に入ると「信濃川」となる）が市の中央部を東から西に通過し、北は上信越高原国立公園の菅平高原、南は八ヶ岳中信高原国定公園に指定されている美ヶ原高原などの 2,000m 級の山々に囲まれ、また、河川沿いに広がる平坦地や丘陵地帯に市街地及び集落が形成されている、緑溢れる森林・里山と清らかな水の流れる川に育まれた自然豊かな地域である。

盆地部分の年平均気温は、摂氏 11.8 度で、昼夜、夏冬の寒暖の差が大きい典型的な内陸性の気候で、晴天率が高く、年間の降水量が 800mm から 900mm と全国でも有数の少雨乾燥地帯となっている。

この気象条件を活かして農業では水稻のほか、果樹、野菜や花きを生産している。特に市内でも寡雨である塩田地域では、農業用水の確保のため、古くから大小数多くのため池がつくられ、雨乞いの祭である「岳の幟」は 500 年以上も続いているとされ、現在は国選択無形民俗文化財として指定されている。

上田地域の歴史は古く、奈良時代には、国分寺、国分尼寺が建立され、信濃国で最初の国府が置かれた地ではないかとも考えられている。鎌倉時代に入ると、幕府の信濃守護職、北条氏が市内の塩田平に居を構え、三代 60 年に渡り鎌倉の仏教文化を花咲かせたため、現在の塩田平は『信州の鎌倉』といわれ、安楽寺の日本で唯一の木造八角三重塔（国宝）をはじめ、重要文化財など数多くの歴史的建造物、史跡が残されている。

■上田市内の文化財（国指定）

種 別	主なもの
国 宝 建 造 物	安楽寺八角三重塔
重要文化建造物	前山寺三重塔、信濃国分寺三重塔、中禅寺薬師堂、常楽寺石造多宝塔
重要文化財彫刻	薬師如来坐像附木造神将立像（中禅寺）、木造惟仙和尚坐像（安楽寺）、木造恵仁和尚坐像（安楽寺）、銅造観音菩薩立像（長福寺）

史 跡	上田城跡公園
重要文化財古文書	紙本墨書生島足島神社文書
選択無形民俗文化財	別所温泉の岳の幟行事、八日堂の蘇民将来符頒布習俗、戸沢のねじ行事

時代が下った戦国時代の天正 11 年（1583 年）、真田昌幸によって上田城が現在の場所に築かれてから、城下町として発達が始まり、上田の地は、政治・文化の中心、物資の集散地として長いこと栄えた。

徳川軍の侵攻を二度にわたって退け、さらに、その後の大阪冬・夏の陣での真田一族らの活躍は、池波正太郎氏によって『真田太平記』に描かれ、市内では上田城のほか、別所温泉や安楽寺などが物語の舞台として登場している。

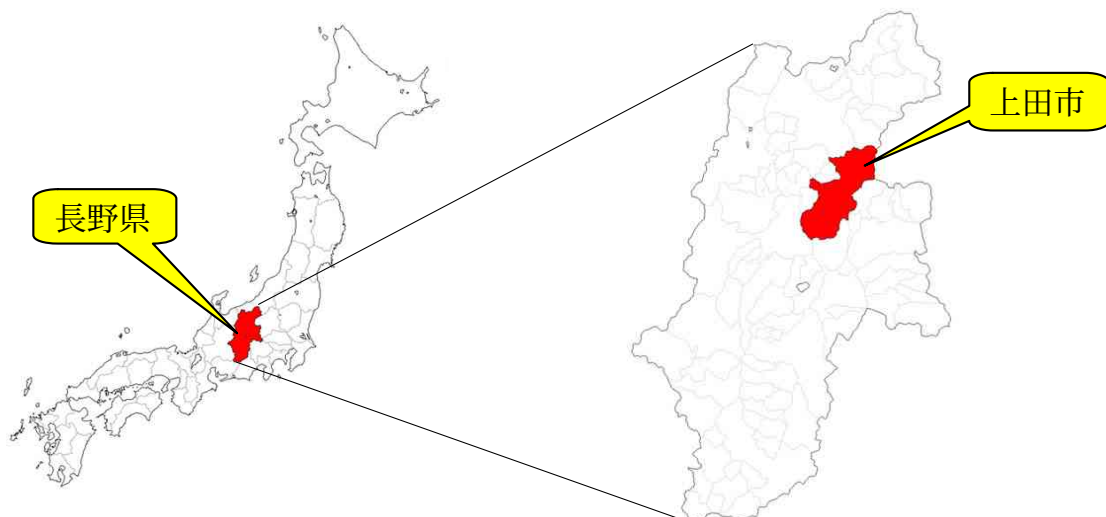
明治から大正時代にかけては、全国有数の蚕種（さんしゅ）の生産地となり、全国の蚕糸業を支える「蚕都」として隆盛を極めた。その名残りとしての近代化産業遺産の指定を受けた建物などが中心市街地内にも残されている。

上田市の商業は、蚕糸業の発展によってさらに促され、明治 21 年（1888 年）当時の上田町の戸数約 2,800 のうち商家が 1,031 戸（約 37%）を占めており、その後新設された大屋駅を使って依田窪（現在の上田市丸子、同武石、長和町）地方、和田峠を越えた諏訪・伊那方面からも繭や諸物資が集まり商圈も大きく広がった。

「蚕都（さんと）」として発展した技術的基盤や進取の精神を受け継いだ輸送関連機器や精密電気機器などを中心とする製造業が、現在の地域経済を牽引しており、製造品出荷額等は 5,806 億円（平成 19 年）と、県内屈指の工業地域となっている。

菅平高原、「信州の鎌倉」塩田平、別所温泉、信州国際音楽村などの雄大な自然や温泉と併せて観光資源が数多く存在している上田市は、年間約 400 万人の観光客が訪れており、現在は観光をリーディング産業として位置付けているほか、晴天が多いという気象上のメリットを生かして、映画・テレビのロケ撮影を官民一体となって支援するフィルムコミッション活動に積極的に取り組み、劇場公開された著名な作品も多い。

平成 18 年 3 月には上田市、丸子町、真田町、武石村が新設合併して人口 16 万 4 千人を擁する新上田市が誕生し、東信州地域の中核都市としての歴史をさらに発展させるための歩みを始めている。



(2) 中心市街地の歴史

上田城を築いた真田氏は、一族の所縁の地から、商人などを移住させ城下に住ませた。それが現在の「海野町」、「原町」の原形となっており、その名残が、上田市真田地域の「本原（もとはら）」、隣接する東御市の「本海野（もとうんの）」という地名となっている。その他市内には、城下に住んだ町人の職業に由来するとされる「鍛冶町」、「紺屋町」、「鷹匠町」等の町名が残っている。



江戸時代になって松代に転封された真田氏から、仙石氏(約 84 年間)、松平氏(約 160 年間)と城主が代わるなかで形成された城下町が、現在の中心市街地の基礎になっている。

また、上田城の築城を契機として形成された城下町としての賑わいのほかに、江戸時代に発達した北国街道沿いの宿場町として、松本方面と結ぶ「保福寺道」や鳥居峠越えて上州吾妻郡と結ぶ「上州道」との結節点となって栄えた歴史を持っており、現在の「柳町」は北国街道沿いの歴史的街並みとして往時の面影を残している。当時の上田は城下町に住む武士・町人と宿場を往来する旅人によって栄えたといつてよい。

しかし、城下町として発達した結果、市街地では、狭い道路でカギの手形に曲がっているところも多く不便とされ、大正から昭和にかけて、市街地内の道路の整備が進められた。

明治 21 年(1888 年)に、信越線が一部開通し、上田駅が千曲川の近くに設置されると、原町、海野町と駅を直線的に結ぶ道路が河岸段丘を切り崩して作られたため、駅の利用者を見込んで新たな商業集積が生まれ、現在の「松尾町」が生まれた。また、松尾町の通りを作るために切り崩した土を利用して作った道路と、初めて千曲川の対岸を結ぶ上田橋が明治 23 年(1890 年)に接続すると、左岸から多くの鉄道利用者が通る現在の「お城口天神通り(旧ニューパール通り)」の元となった。

一方、鉄道の出現によって、それまで、商業の中心であった木町、柳町等は、徐々にその集積を失い、少しずつ上田駅寄りに商業の重心が移っていった。

呉服屋であったほていやが昭和 15 年(1940 年)に海野町に移転し、昭和 35 年(1960 年)には同地で、当時、市内唯一の百貨店として改築した(その後昭和 58 年(1983 年)閉店)以降、イトーヨーカ堂(昭和 52 年(1977 年)開店)、西友ストア上田店(昭和 49 年(1974 年)開店、後 51 年に「上田西武」に改称、平成 12 年に「L I V I N」と改称、平成 21 年 3 月閉店)などの大規模小売店舗が、比較的、上田駅に近い場所に開店したのも、結果的にはその流れに沿ったものであるとも言える。

ほていや百貨店の出店以降、昭和 30 年代後半には、上田ショッピングセンター(昭和 35 年(1960 年))、上田中央ビル(昭和 37 年(1962 年))、上田名店ビル(昭和 38 年(1963 年))が、商業者の共同事業によって続々と誕生し、中央交差点付近は、「中央一番街」として中心商店街の中でも一番の賑わいの場所となったが、40 年以上を経過した現在、共同ビルを含め商店街をどのように再構築していくか大きな課題である。

昭和 30 年代に入ってから車が増え始めたため、当時、狭かった市内の道路は混雑するよう



上田わっしょい（夏祭り）

になった。同 35 年（1960 年）からは現在の中央通り、同 45 年（1970 年）からは海野町通りの道路拡幅を実施し、同 48 年（1973 年）には、商店街の通りにアーケードを設置した。

一方、信越線とともに公共交通の要であった鉄道として、大正末期から昭和初期にかけて隣接する丸子町と上田市を結んでいた上田丸子電鉄丸子線は昭和 44 年（1969 年）、真田町と上田市を結んでいた上田交通（上田丸子電鉄が改称）真田傍陽

線が昭和 47 年（1972 年）に続々と利用者の減少を理由に廃止された。現在は、同社の路線は別所線のみが残り、官民挙げて存続支援に取り組んでいる。

昭和 49 年（1974 年）、ユニーが原町に出店した後、大型店の出店が相次ぎ、商店街は活況を極めた。その一方で海野町は、上田市の中心商店街の中では最も早い昭和 42 年に商店街振興組合を設立して、利用客確保のために駐車場の設置や、全国の中でも先進的とされる歩行者天国「海野町広場」の取組みを始めた。

昭和 58 年（1983 年）には、ほていや百貨店が、駐車場不足による客離れのため海野町から撤退し、市内の常田に移転したことを始め、大型店舗は、次第に中心商店街以外の場所に立地するようになり、1988 年（昭和 63 年）にはユニーがやはり駐車場の不足による客離れによって上田市から撤退した。中心商店街の歩行者通行量は調査の開始以来、減少傾向が続いており現在に至っている。

上田市全体に占める中心商店街の年間商品販売額は低下しており、上田駅から遠い商店街ほどその傾向が顕著になりつつある。



海野町商店街七夕祭り

（３）中心市街地に蓄積されている歴史的・文化的資源・景観資源、社会資本や産業資源などのストック状況

ア 上田城跡公園

天守閣を擁する派手な城郭ではないが 1583 年の築城以来 426 年の歴史を持ち、都市公園法の施行 50 周年を記念した「日本の歴史公園百選」（（社）日本公園緑地協会などが構成する記念事業実行委員会による）、「日本 100 名城」（財団法人日本城郭協会による）にも選ばれた上田市の市街地の形成の礎としてのシンボルである。市民にとっては憩いの場所であり、年間約 100 万人の観光客が訪れる場所でもある。

イ 近代化産業遺産

蚕都として経済的に発展した歴史を今に伝える建物であり現役として使われている建物もある。明治から昭和初期の雰囲気を持つため映画・テレビの撮影にも良く使われる。

＜中心市街地付近の製糸関連近代化産業遺産＞

信州大学繊維学部講堂
上田蚕種(株)事務棟
笠原工業(株)繭倉
笠原工業(株)倉庫
常田館、同館所有物



柳町

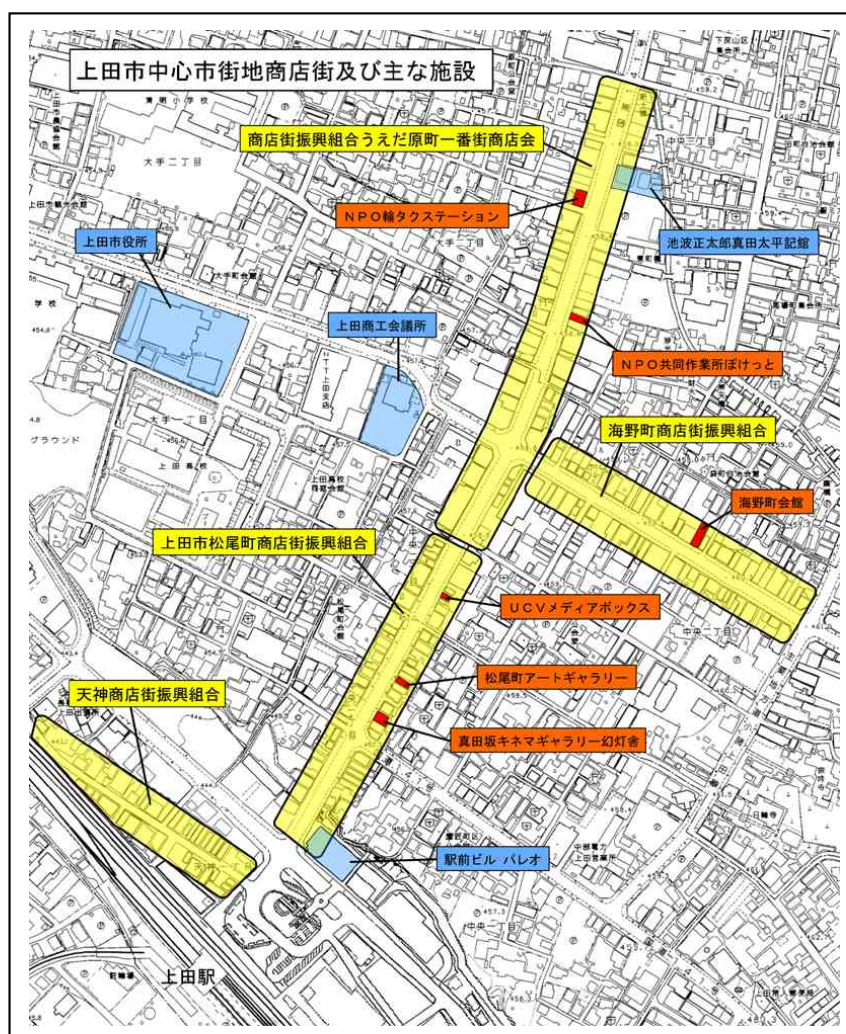
ウ 柳町

江戸時代の北国街道の雰囲気を残す通りである。上田市の中でも景観の保全に住民が積極的に取り組む先例となっている。訪れる観光客も多いほか、映画・テレビの撮影にもよく使われる。

エ 中心商店街

北国街道沿いに発達した古い歴史を持つ原町、海野町のほか、鉄道の開通によって新たに発達した松尾町、天神など。

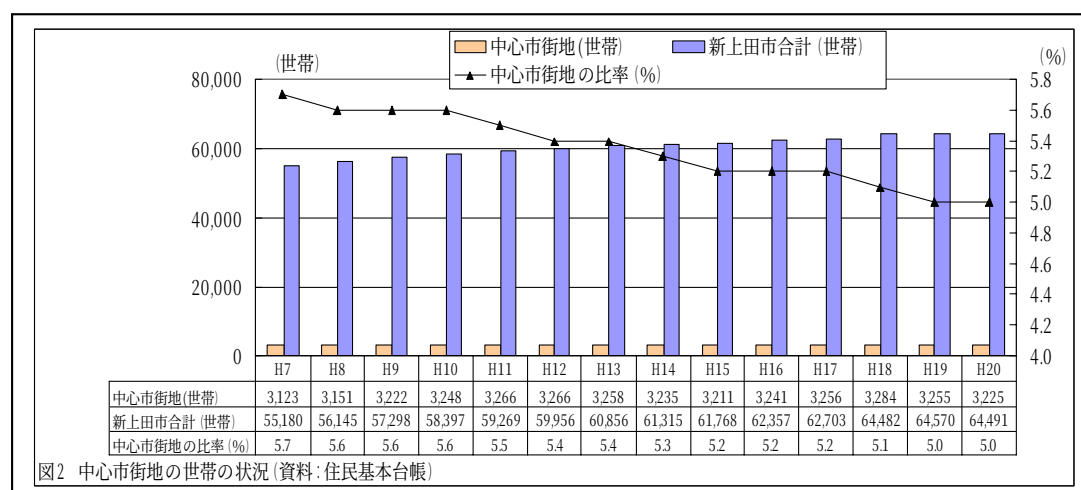
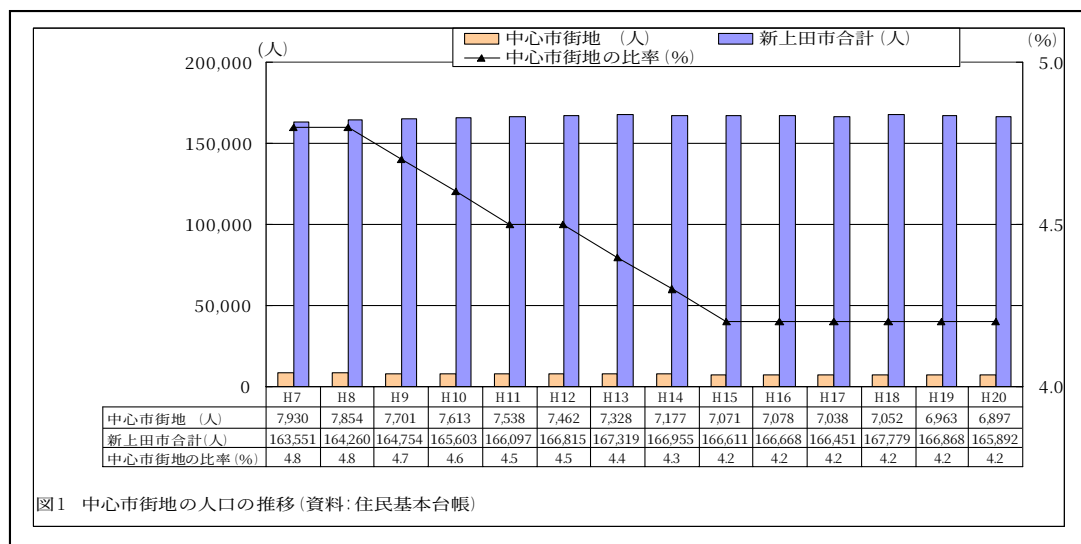
その商圈はかつて「北上州から諏訪、伊那地方にも及んだ」(諏訪倉庫75年史)とされている。明治21年(1888年)当時の上田町では戸数約2,800戸のうち商家が1,031戸(約37%)を占めていたという。現在も東信州地域の中核的な商都として、商業も盛んである。



〔2〕 中心市街地の現状分析

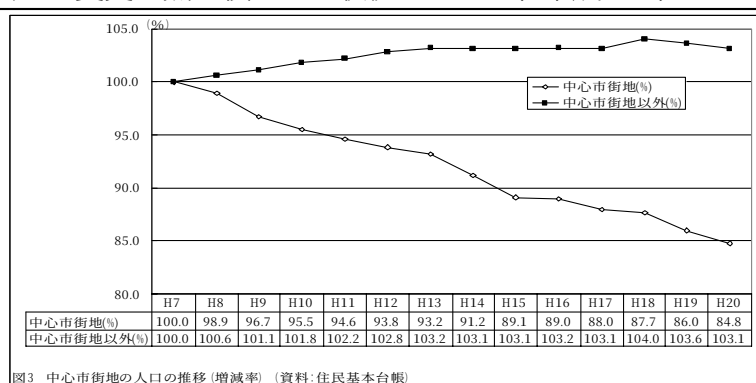
(1) 人・コミュニティに関する状況

1) 人口・世帯



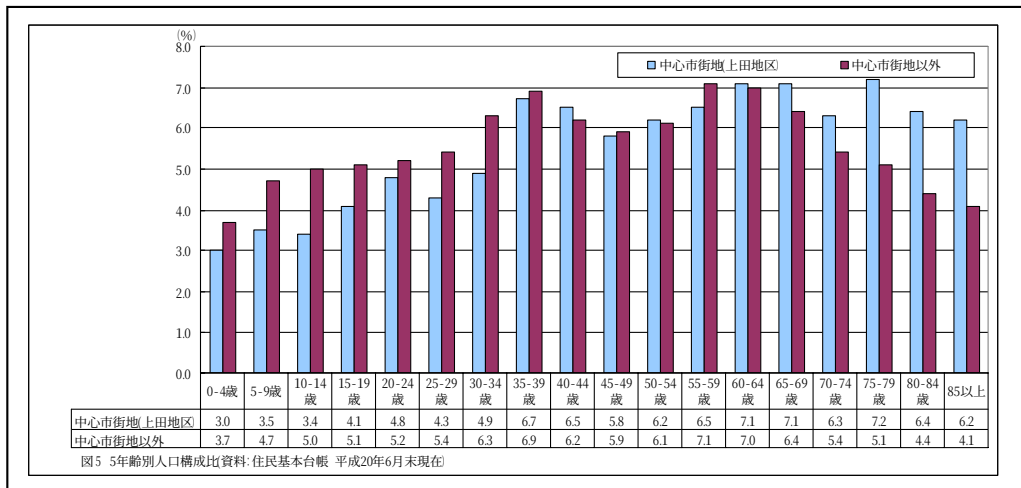
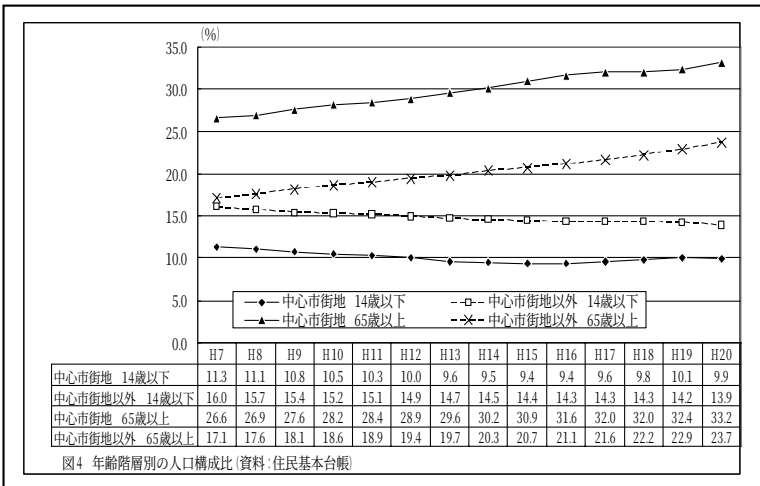
中心市街地の人口は 6,897 人、世帯数は 3,225 世帯であり、上田市の人口の約 4.2%、世帯の約 5.0%の世帯数が集積している地域である。(平成 20 年 6 月末現在)。上田市の人口は、近年大きな変更が無く横ばいの状況であるが、平成 13 年をピークに減少に転じている。

この間も中心市街地の人口は減少を続け、現行の基本計画策定後も同様である。平成 7 年を 100 とした場合に既に約 85 ポイント以下になっている。



2) 年齢別人口

中心市街地の15歳未満の年少人口の割合は、約10%、65歳以上の老年人口の割合は約33%（いずれも平成20年6月末現在）である。上田市（旧）の中心市街地以外の状況（年少人口約13%、老年人口約25%）と比較すると少子化、高齢化が顕著に現れている。5歳階級別の人口の構成比をみると、中心市街地では今後子どもの比率は減少が予想される一方で、60歳から64歳までの区分の割合が高く、今後さらに高齢化が進展するものと考えられる。

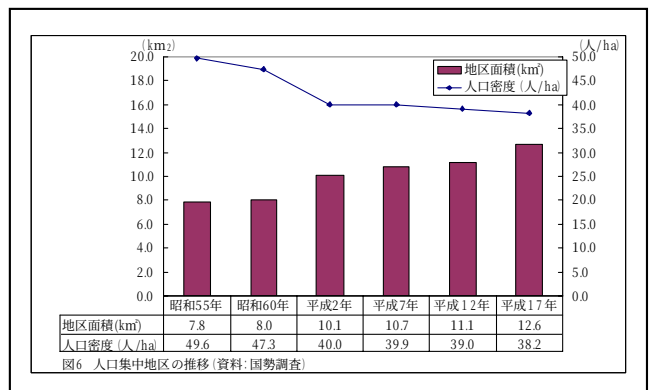


(2) まちに関する状況

1) 人口集中地区（DID地区）

上田市（旧）の人口集中地区は拡大傾向を続けており、平成17年には12.6km²となっており、市街地の郊外への拡散が続いている。

また、地区面積の拡大に比べ、平成17年には、人口集中地区の人口密度は38.2人/haまで低下している。



2) 低未利用地等

中心市街地では低未利用地の土地活用が図られた場所（※）もあるものの、駐車場の増加がみられ、平成18年には平成11年に比べ約9,000m²の駐車場が増えている（約4%の増加）。それらの駐車場は中心市街地全体に虫食い状に拡散している。

規模の大きな未利用地となっていたJ T上田工場跡地、旧第一中学校では具体的な土地活用が進みつつあり、写真美術館用地はイベント会場として活用を始めているが、平成 20 年には中央二丁目交差点に空き地が生じ、未利用地となっている。

※) 主な低未利用土地の活用予定

- ①写真美術館用地⇒街なか駐車場
- ②旧一富士跡地 ⇒大手門地区（緑地広場、商業等施設）整備
- ③J T上田工場跡地⇒交流・文化施設、商業施設、大規模分譲住宅地
- ④旧第一中学校跡地⇒総合保健センター、商業施設

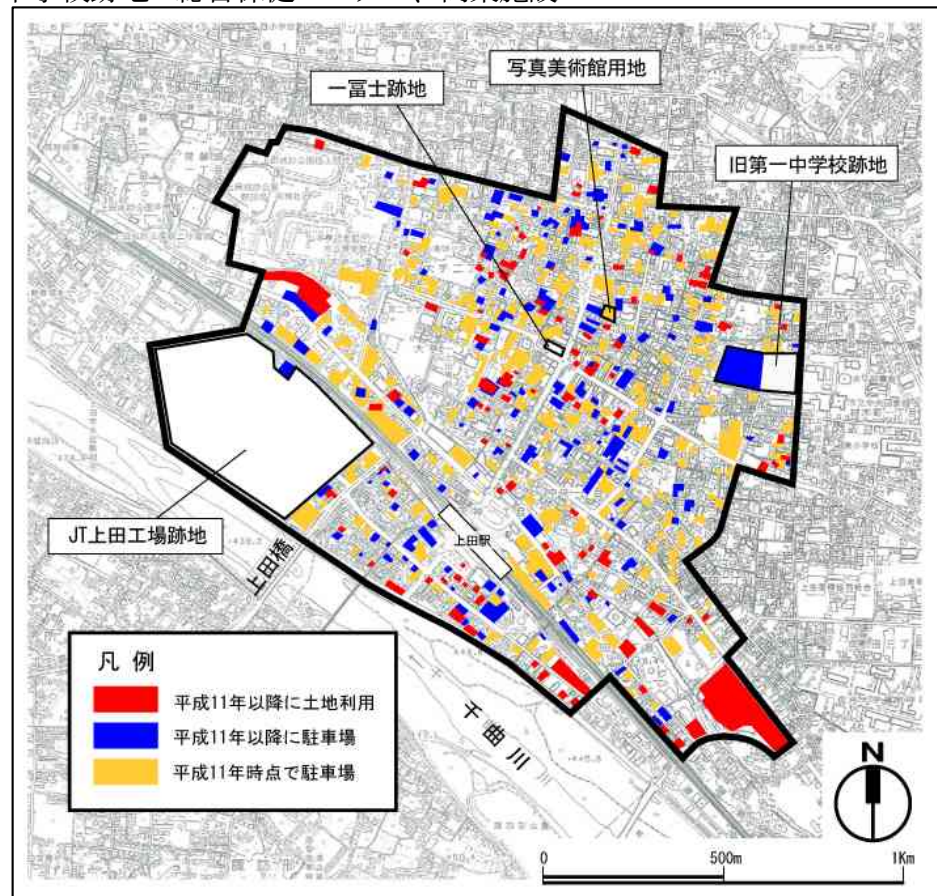


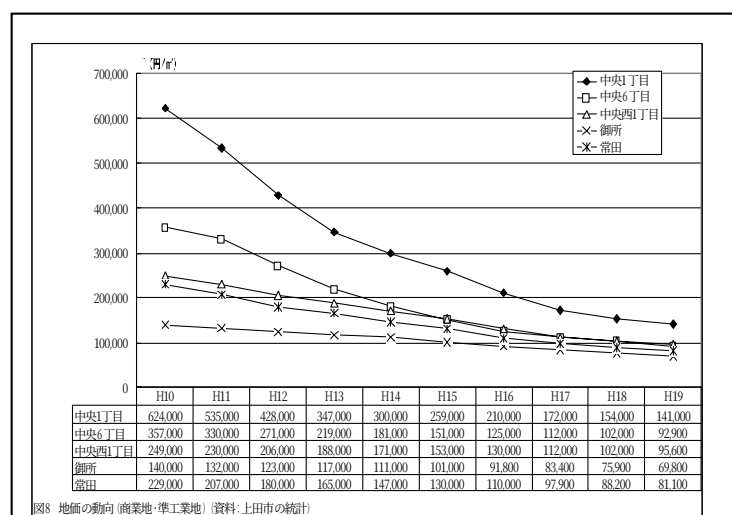
図 7 駐車場の動向

資料：(旧)上田市中心市街地活性化基本計画報告書（平成 11 年 9 月）及び平成 18 年住宅地図
※前回調査（平成 11 年）の駐車場と平成 18 年度の住宅地図上の駐車場を比較し表示

3) 地価

中心市街地の地価は商業地、準工業地域、住宅地とも下落を続けている。

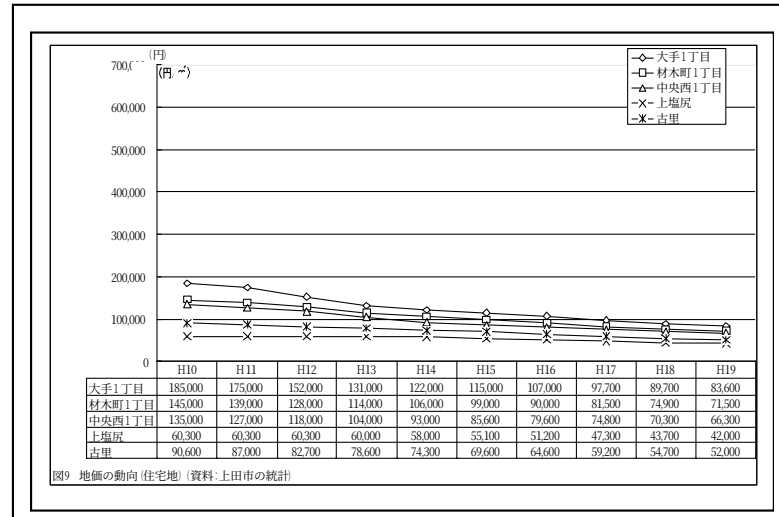
長い間の懸案であった駅前再開発が 15 年度に完了したにもかかわらず、中



央1丁目が平成10年時点の地価の22.6%に下落し、中心商店街以外の地点との幅が縮小している。

全体に近年は、下落幅が10%以下に縮小してきており、やや下げ止まり傾向が見られる。

住宅地では大手1丁目が平成10年時点の地価の45.2%に下落しているが全体的として概ね50%前後であり商業地よりも下落率が少ない。中心市街地に比べ郊外は下落幅が小さく、従前に比べ差が縮小している。



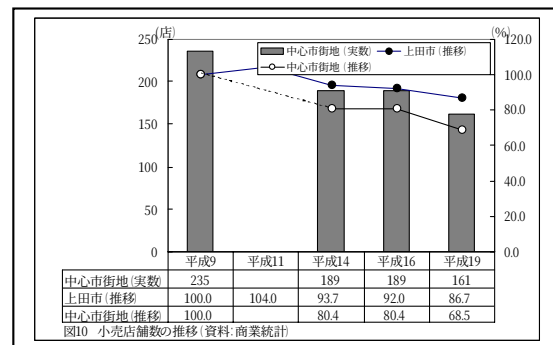
(3) 商業・賑わいに関する状況

1) 小売商業

① 商店数

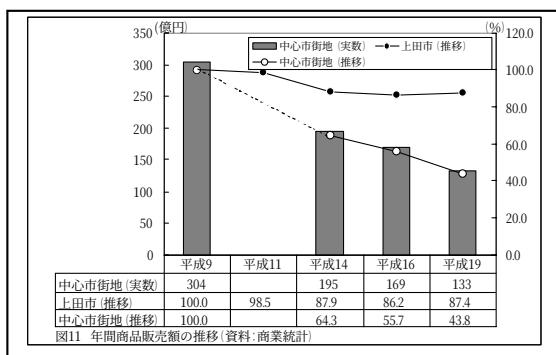
上田市(旧4市町村合計)の小売商店数は、昭和57年がピークとなり、以後は減少が続いている。中心市街地では商業環境立地特性の調査が開始された昭和54年以後、一貫して減少している。

上田市全体に比較して中心市街地の方が大きく減少している。平成9年から19年の間のわずか10年間で約1/3の商店がなくなっている。



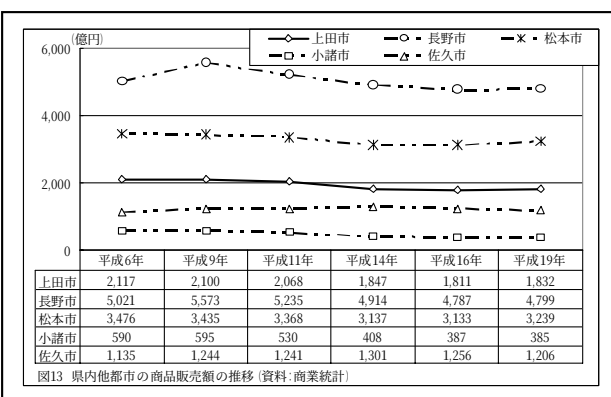
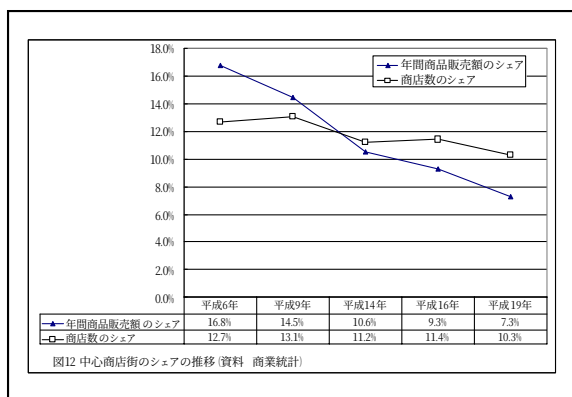
② 小売年間販売額

上田市(旧4市町村合計)の年間販売額は平成3年がピークとなり、平成3年から9年までは2,100億円台で概ね横ばいに推移した後、減少傾向を示している。中心市街地では昭和57年がピークとなっている。



中心商店街でのいわゆる大規模小売店舗の出店は概ねこの頃までで、以後は郊外への出店と中心商店街からの撤退・移転が続く。

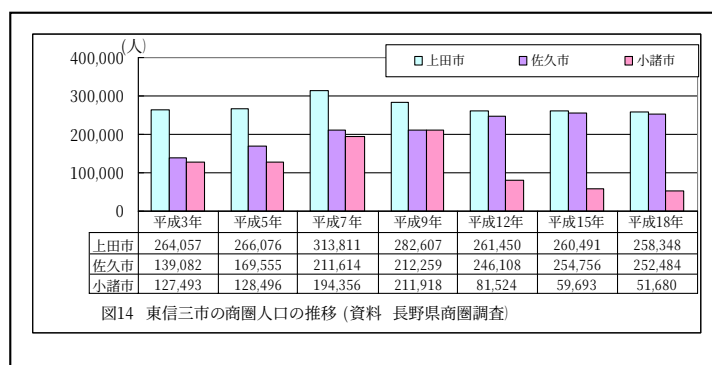
その後は年を追うごとに減少傾向が激しくなっており、平成19年では、平成9年からのわずか10年間で半以下の販売額となっている。上田市全体に占める中心商店街のシェアは減少し続けている。



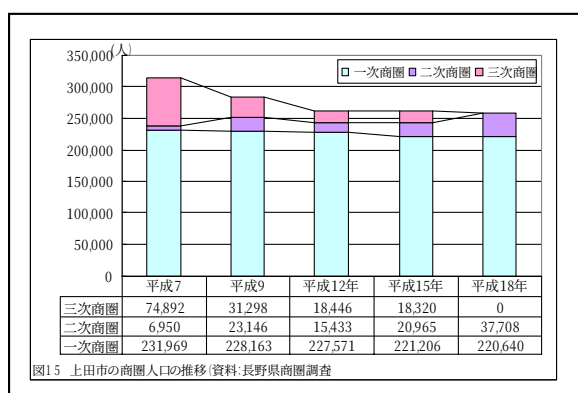
平成6年以降、上田市の年間商品販売額は前年比で減少が続いていたが、平成19年には、長野市、松本市とともに若干持ち直している。一方、佐久地方の商圈を形成している小諸市、佐久市は微減となっている。

2) 商圈

上田市は、周辺市町村、並びに小諸、佐久商圈を含む東信州における商業の中心都市であるが、このうち近年の特徴として佐久商圈が大きく伸張している。商圈人口では佐久市の商圈の伸びが大きくなっており、上田市とほぼ拮抗する状態になっている。



平成18年の調査では、現在の上田市、青木村、坂城町、長和町、東御市の5市町村が吸引率30%以上の一次商圈を形成している。



上田市の一次商圈に含まれる自治体の数は近年、大きくは変わっていないが、18年の調査では立科町が上田市の一次商圈から二次商圈になるとともに佐久市の一次商圈に組み込まれている。また、上田広域圏である東御市や長和町が、佐久市の二次又は三次商圈となっている。

商圈人口は、上信越自動車道の長野ー軽井沢間が開通する前年の平成7年がピーク

となっており、その後、商圈に含まれる自治体数の変動や人口動向によって、18年までの11年間に約17%減少している。

今後は人口の減少により商圈は拡大しても商圈人口の数値は減少する場合があると考えられる。

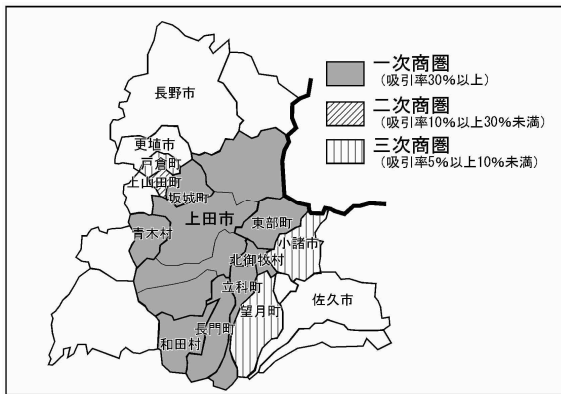


図16 上田市商圏（平成7年）

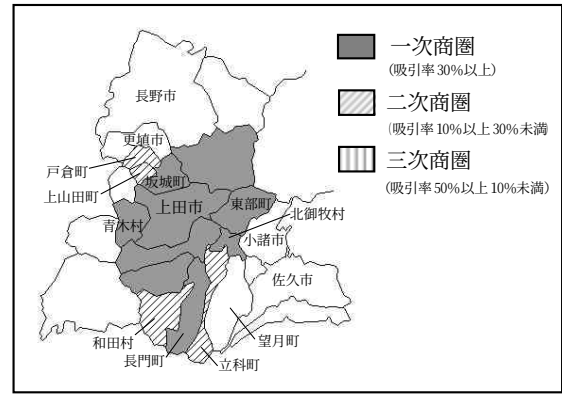


図17 上田市の商圏（平成18年） 資料：長野県商圏調査

3) 歩行者通行量

歩行者通行量（休日）は昭和55年の調査開始からほぼ一貫して減少傾向にあり、昭和55年当時、全体で約82,000人であった歩行者通行量は、平成20年には約20%の約16,000人にまで落ち込んでいる。19年に比較するとわずかであるが持ち直した。

現行基本計画策定後、平成15年、16年に歩行者通行量の増加がみられるが、これはお城口の再開発事業の完成や商店街の電線地中化工事が終了したことなどの効果の現れと考えられる。（暦年の調査地点で異動があるため全期間に渡って調査ポイントになっている地点の数値による）

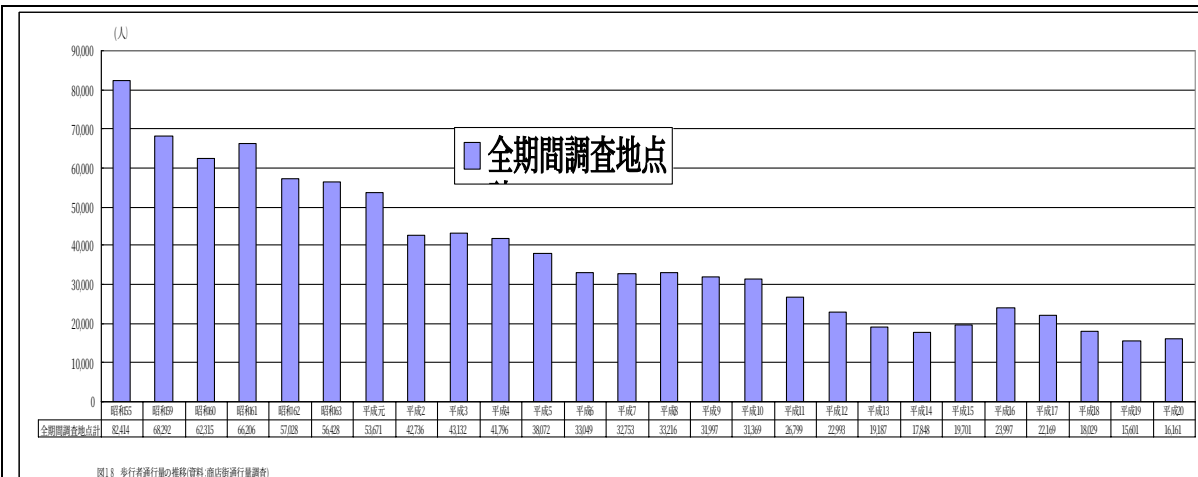


図18 歩行者通行量の推移(資料：商店街通行量調査)

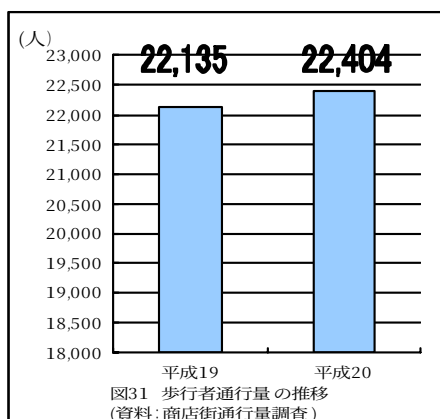


図31 歩行者通行量の推移
(資料：商店街通行量調査)

上図：休日歩行者通行量(3月)

左図：平日歩行者通行量(10月)

平成7年にほていや百貨店が閉店したときは全体では大きな影響がなく平成10年までは横ばい傾向であったものの、平成11年当時、県内最大といわれたショッピングセンターが佐久市に開店したときと同じくして、減少の幅が拡大している。

◆大型商業施設の出退店、公益施設・中心市街地の基盤整備との前後の比較

- ・昭和58年 ほていや百貨店が常田へ移転

海野町／昭和55年：24,841人 ⇨ 昭和59年：21,881人

- ・昭和63年4月 ユニー上田中央店（原町）の撤退

原町／昭和63年：16,612人 ⇨ 平成元年：8,864人

- ・平成11年4月 佐久市に当時県内最大といわれたショッピングセンターがオープン

駅前／平成11年：7,845人 ⇨ 平成12年：3,064人

- ・平成14年11月 中央通りの電線地中化、歩道の高質化完成（海野町は12年12月に完成）

原町／平成14年：3,061人 松尾町／平成14年：8,281人 海野町／平成14年：5,156人 駅前／平成14年：2,585人	⇨	平成15年：3,714人 平成15年：9,009人 平成15年：6,978人 平成16年：3,134人
--	---	--

（駅前、再開発事業施工中につき15年は未調査）

- ・平成15年12月 駅前再開発事業完成によって、商店街の基盤整備がほぼ終了。

原町／平成15年：3,714人 松尾町／平成15年：9,009人 海野町／平成15年：6,978人 駅前／平成14年：2,585人	⇨	平成16年：3,305人 平成16年：9,454人 平成16年：8,646人 平成16年：3,134人
--	---	--

（駅前、再開発事業施工中につき15年は未調査）

- ・平成16年8月 八十二銀行松尾町支店が統合のため移転

松尾町／平成16年：9,454人 ⇨ 平成17年：8,449人

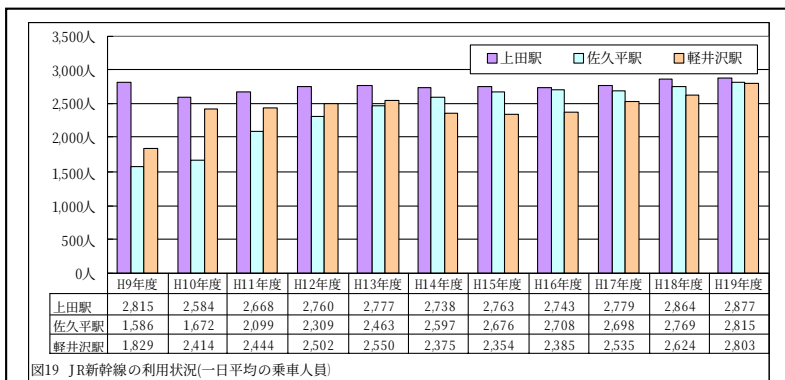
- ・平成18年4月 スーパーやおふく海野町店閉店

海野町／平成18年：4,716人 ⇨ 平成19年：3,566人

- ・平成19年8月 お城口天神通り電線地中化

駅前／平成19年：8,216人 ⇨ 平成20年：7,072人

(4) 交通に関する状況



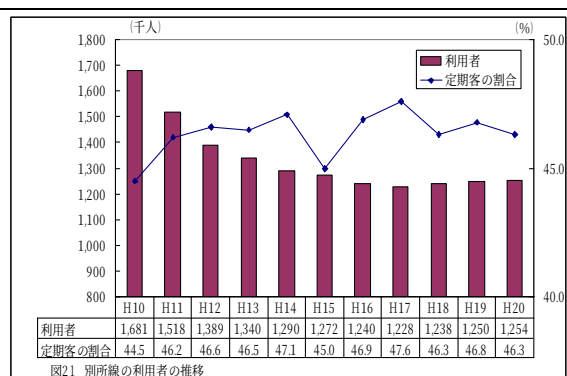
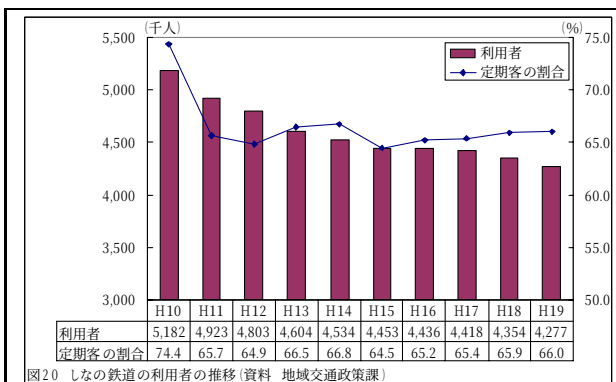
1) 鉄道

上田駅は、3つの鉄道事業者による路線が接続する交通の結節点として重要な位置を占めている。

北陸新幹線上田駅の一日の乗車人員は開業以来わずかな増加傾向が見ら

れるが、東信州の他の各駅との差は年々縮小し、平成 19 年度ではほぼ同じになっている。

近年、首都圏から上田駅まで新幹線を使って観光バスに乗り換えるツアーが増えているが、上田駅温泉口を乗り換えに使い駅での滞在時間も短いため中心商店街への集客に結びつきにくい状況である。



しなの鉄道の利用者は、減少傾向にある。定期券利用の割合は、近年は約 65%前後で推移している。

上田電鉄の利用者は、減少傾向が続いていたが、平成 18 年以降 3 年連続で乗車人員が増加した。

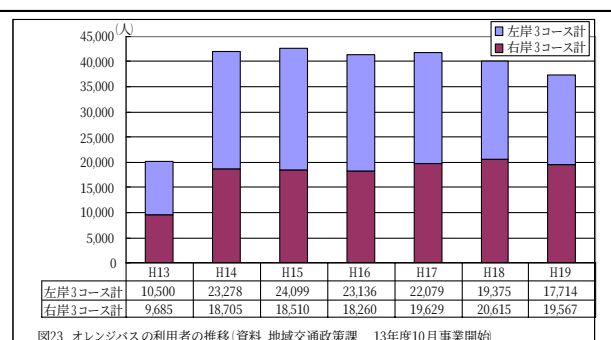
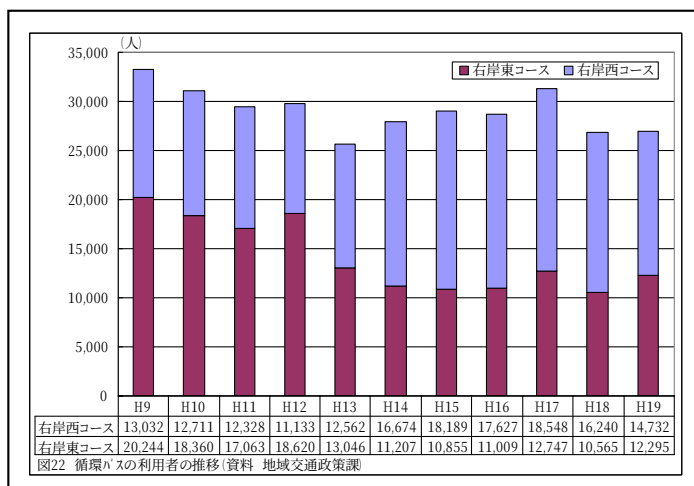
2) バス

上田市内には路線バス 8 路線、廃止代替バス 8 路線、市が運営するコミュニティバス 6 種類（上田地域循環バス、丸子地域循環バス、真田地域バス、真田地域ふれあいバス、武石デマンド交通システム、オレンジバス）が運行されている。

中心市街地を運行するコミュニティバスとしては、上田地域循環バス、オレンジバスの二種類である。

上田地域循環バスの利用者数は、年間約 3 万人前後で推移している。

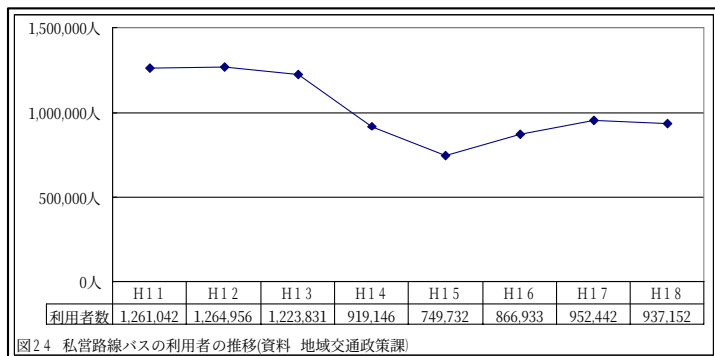
右岸東コースの利用が減少し、右岸西コースの利用は増えている。なお、循環バスは平成 20 年 10 月からコースを見直した。



あり、最近は特に減少幅が大きくなっている。

高齢者福祉センター利用者の送迎の途上で一般客の乗降も可能なオレンジバス全体の利用者数は、年間約 4.2 万人前後で推移していたが、近年は減少傾向を示している。コース別には、城下・塩尻、神川・神科、豊殿・神科の千曲川右岸を走るコースの利用者数は比較的堅調だが、浦里・室賀、西塩田、東塩田の左岸を走るコースでは平成 15 年度をピークに減少傾向に

私営バス路線（上電バス、千曲自動車、JR 関東）は、ほとんどが上田駅にアクセスしているが、年々利用者は減少し、15年に再び増加し始めている。高齢化社会を迎えて公共交通の維持は不可欠となるが現時点では利用者はかつてに比べて減少している。

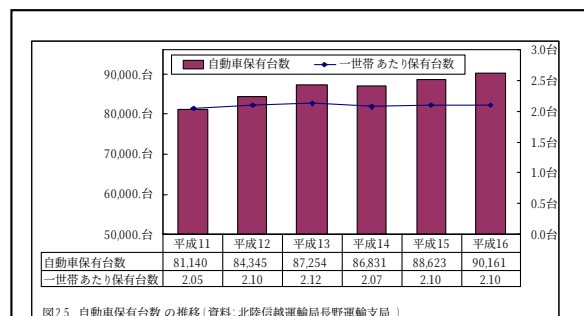


3) 車利用

上田市(旧上田市)の自動車保有台数は増加傾向にあり、平成16年度末現在で90,161台である。

上田市の人口は平成13年にピークを迎えているが、世帯数は平成19年がピークとなっているため、保有台数は増えても一世帯あたりの自動車保有台数は、約2.1台/世帯で推移し、大きな変化はない。

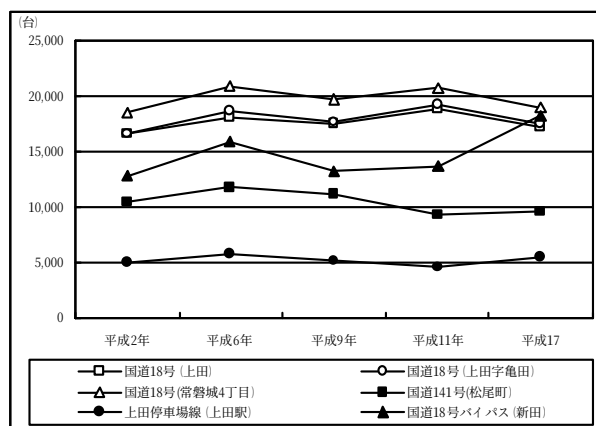
今後は、高齢化社会の一層の進展により 運転免許の返納者も含めて自動車を運転できない年齢層の増加が今後、懸念される。

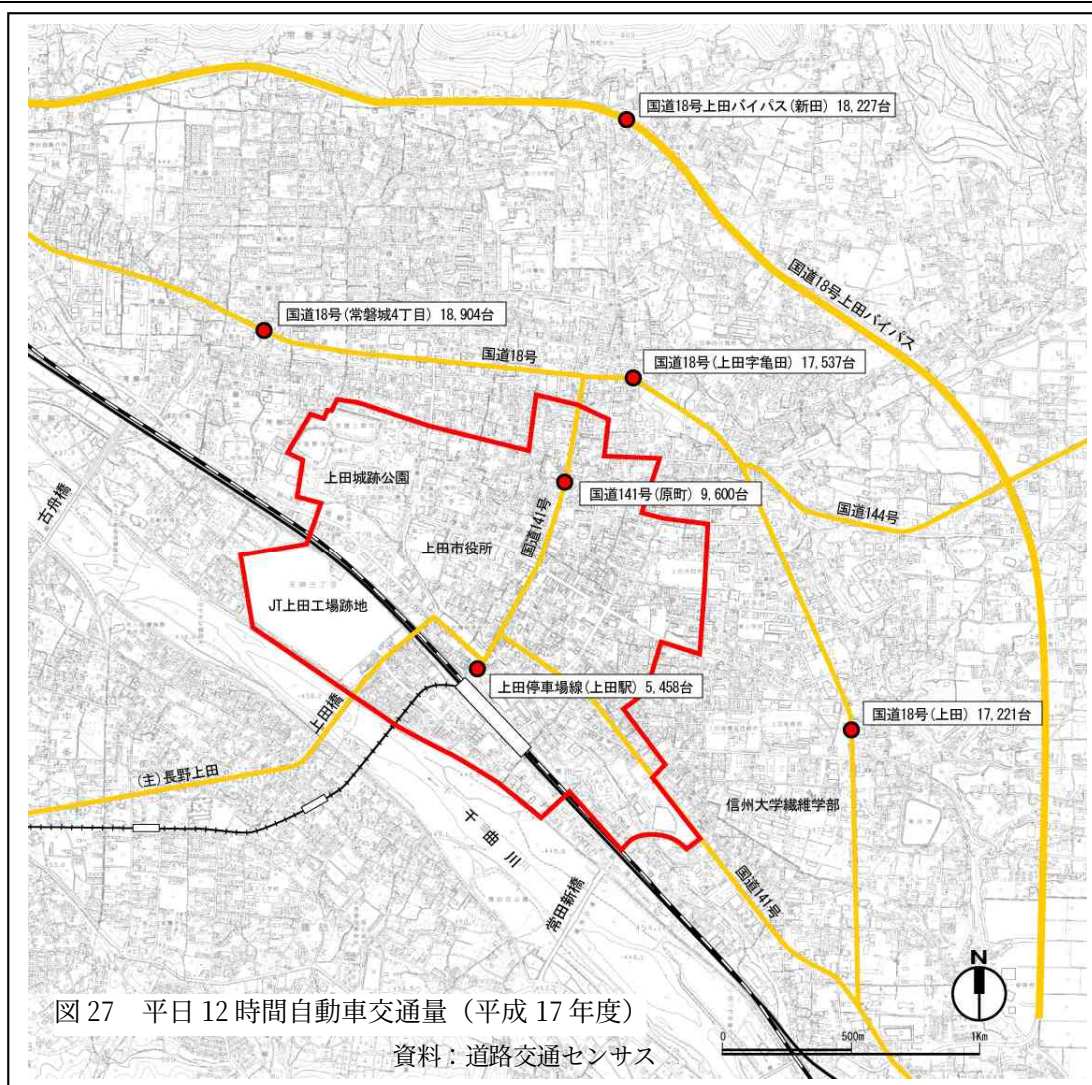


4) 自動車交通量

中心市街地周辺の主要な道路の平日12時間自動車交通量は、国道18号バイパス(新田)において増加している。

一方で、中心市街地の国道141号(松尾町)においては、減少しており、道路整備等に伴って、自動車交通の集中が郊外部へ移っている。

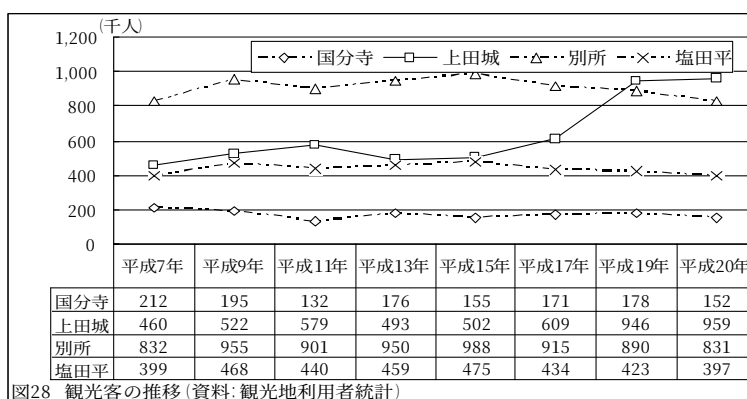




(5) その他

①上田城観光客

平成 16 年から「千本桜まつり」と称して上田城跡公園への観光誘致に力を入れた結果、最近は近隣の他の観光地に比較して大きく伸びているが、団体バスの利用が多いため、商店街への来街には結びついていない。どのように結びつけるかが課題となっている。



② 池波正太郎真田太平記館

中心市街地活性化の拠点施設である真田太平記池波正太郎館は平成 10 年度に開館して以来 20,000 人から 25,000 人程度の間で推移していたが、17 年度以降は入場者数が増え続けている。

